

日文研国際研究集会「石川淳と戦後日本」(2008年6月)参加者の皆様へ

2009年1月5日

新年早々、このような悲しいお知らせを届けなくてはならないこと、まことに残念ですが、ウィリアム・タイラー先生が1月2日にオハイオのご自宅で逝去されました。

タイラー先生は日文研客員教員の任期を9月末日で終えられ、お元気でオハイオに戻られたのですが、11月の下旬に心臓の動脈瘤でangioplastyの手術を受けたそうです。その際に胃の調子が良くないので検査してもらったところ、胃癌が見つかりました。かなり進行しているが、心臓の負担も考えると、癌に対する治療方法は何もないと言われたようです。鎮痛剤の副作用でしょうか、12月中旬から入院され、年末には肝臓と腎臓が機能しなくなり、最期は家に帰りたいたいという本人のご希望で、今年1月1日に帰宅されました。そのときははっきり意識があったそうです。そして、2日の朝、ご自宅で安らかに永眠なさいました。

長年のパートナーである下里氏は、亡くなった後、タイラー先生の体を清め、北野天満宮の骨董市で買い求めた羽織と袴を着け、そして、一番愛着のある読書用の眼鏡をかけてあげたとうかがいました。半眼開いたままなので、まるで弥勒菩薩のように見えたということです。

下里氏はご遺体を火葬になさいますが、お葬式はなさらないとのこと。オハイオ州立大学はmemorial serviceを行うとのことですが、日取りは未定です。

ウィリアム・タイラー氏は、今日のアメリカで最も優秀な日本現代文学の翻訳者、研究者として活躍されておりました。昨年、大学院卒業生との長年の研究成果である日本モダニズム小説のアンソロジーに周到な解説を付し、ハワイ大学プレスから刊行。大正から昭和戦前期の文芸シーンを一新するものとして、英語圏の研究者を瞠目させたのは記憶に新しいところです。石川淳の小説に長年取り組み、日文研では『荒魂』の翻訳に腐心なさっておられたことは、皆さん、よくご存知ですが、このお仕事は三分の二までのところで、中断となりました。最後まで気にかけておられたとうかがいました。さぞ、無念だったことでしょう。タイラー先生を失ったこと、まことに残念でたまりません。が、いまは静かに、ご冥福をお祈りするしかありません。

なお、皆さんのご協力をいただき、研究集会報告書『石川淳と戦後日本』の準備は順調に進んでいます。タイラー先生の基調報告などは鈴木が編集し、タイラー先生との共編で刊行いたします。また『荒魂』の未完翻訳および追悼文集をそえる所存です。お志のあるかたは鈴木まで追悼文をお寄せください。

以上、ご報告とお願いまで。

国際日本文化研究センター 鈴木貞美